

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 3日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320016

研究課題名（和文） 宗教概念ならびに宗教研究の普遍性と地域性の相関・相克に関する総合的研究

研究課題名（英文） A Comprehensive Study of the Universality and Locality of the Concept of Religion and Religious Studies

研究代表者

池澤 優（IKEZAWA MASARU）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：90250993

研究成果の概要（和文）：

本研究は、欧米において成立した近代的宗教概念とそれに基づく宗教研究が、世界各地、特に非欧米社会においてそのまま受容されたのか、それとも各地域独自の宗教伝統に基づく宗教概念と宗教研究が存在しているのかをサーヴェイし、従来「宗教学」の名で呼ばれてきた普遍的視座とは異なる形態の知が可能であるかどうかを考察した。対象国・地域は日本、中国、韓国、インド、東南アジア、中東イスラーム圏、イスラエル、北米、中南米、ヨーロッパである。

研究成果の概要（英文）：

This study has attempted a comprehensive survey regarding the globalization of the concept “religion” and that of religious studies, both of which had originated in the modern West. It has aimed to find out an alternative to the universal vantage point of *Religionswissenschaft*. The countries and regions covered are: Japan, China, South Korea, India, Southeast Asia, Middle Eastern Islamic countries, Israel, North America, Latin America and Europe.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	6,400,000	1,920,000	8,320,000
2011年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2012年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
年度			
年度			
総計	15,000,000	4,500,000	19,500,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：宗教学

キーワード：宗教学 宗教概念 宗教 グローバリゼーション（ポスト）コロニアリズム

1. 研究開始当初の背景

本研究の中心メンバーは、かつて1998～2000年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)「近代的「宗教」概念と宗教学の形成と展開—日本を中心とした比較研究—」（研究代表者：島菌進）を行い（その研究成果は島菌進・鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』、ペリかん社、

2004、として公刊された）、近代的な宗教研究が依って立つところの宗教概念は、本来的には特定の文化的・時代的背景の制約を受けた特殊のものであり、宗教学の言説が拡大していく中で、様々な立場から再解釈される過程を通して、様々な文化へと拡散していったことを明らかにした。宗教研究はあらゆる文

化の中に「宗教」という切り出し可能な固有の領域が存在することを前提としているが、そのような普遍的な宗教概念は、最初から普遍的なものだったのではなく、近代の過程の中で構築された可塑的なものであり、これからの状況の中で変化していく可能性もあるのである。

宗教学が研究対象にしている「宗教」概念が特定の時代と社会の限定を受けた特殊なものであるということは、宗教学もまたその特殊な概念の上に成り立つ特殊な知の形態であるということを意味している。その認識をベースに、本研究グループの中心メンバーは、2003～2005年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)「現代世界における「宗教」研究の新動向を巡る調査および検討」(研究代表者：鶴岡賀雄)において、各地域における宗教研究の概況に関する調査も行った。それは必ずしも各地域の宗教学の知としての特殊な性格に関するものではなかったが、それでも各地域で宗教学の内実が相当違っていること、それはそれぞれの文化における宗教的伝統を受け止める中で不可避的に生じてきた差異である可能性が明らかになった。

2. 研究の目的

本研究は、以上の諸研究を拡大・発展させ、世界的に見て、地域的・個別的要素が宗教研究においてどのように反映されているのかを調査し明らかにすることを目的とした。近代的な「宗教」概念に基づいて宗教全体を俯瞰的に捉えて相互に比較し、あるいは何らかの法則性を発見しようとする、普遍性指向の宗教研究は、どのくらいの広がりをもって遂行されているだろうか。あるいは、その地域ごとの宗教状況に向かい合い、その中で個別の宗教にかかわる言及をしたり、あるいは個別の宗教伝統を解釈したりするような研究が上回っているだろうか。研究を始める段階での背景となる問題意識は、グローバリゼーション(普遍主義)の普及と、ポスト・コロニアリズム(相対主義)の潮流という、相反する流れが併存、相克する現代において、「普遍的なるもの」と「個別的なるもの」がどのような布置にあるのかを、宗教研究という分野を事例に明らかにすることであった。「普遍的なるもの」は未だに有効なのか、「個別的なるもの」が凌駕する局面にあるのか、それとも「個別的なるもの」を通し、何か新たな普遍が求められているのかを展望しようとしたのである。

このような研究の意義は二つあると言える。一つはそれが日本の宗教研究をどの方向

に展開していくべきかについて、参考になるということである。先述のように、近代的な普遍的「宗教」概念が実は特定の時代的・文化的背景から生じたものであり、その普遍性はアプリアリには前提できないという認識は、既に学界の共有するところになっているが、では、そのような研究に代わる視点が何であるのかは、必ずしも明確になっていない。これから我々がどのように宗教という語彙を用い、それを研究していくべきかと考える上で、他地域の事例は重要な参照対象になるはずである。

第二に、宗教研究が「宗教」概念の上に成り立っている以上、この研究はそのような宗教研究が今後も有効なのかという問題に通じる。地域的な宗教伝統に向かい合い、それを再解釈していく営為は、もしかすると「宗教」概念の内容を変更させることにつながるかもしれない。そして、学界における議論は単に研究者の輪の中にとどまるものではなく、それが伝達され、読まれる過程を通し、人々の意識を変えていくとするなら、この問題は、宗教という分野の捉え方が変わっていくかもしれない、あるいは文化ごとに異なる宗教イメージが産出されていくかもしれないという問題に通じるのである。特に、伝統の再評価は、しばしばナショナリズムや原理主義の現象と結びついているため、今後、文化的な相克と協調がどのような方向へ進むのかを考える上でも、この問題は重要であると言える。

3. 研究の方法

上述のような問題関心で研究を設定するにあたっては、宗教学が最初に成立したヨーロッパとアメリカの状況はもとより重要であるが、それとは異なる文化的伝統を持ち、日本と同様に近代化の過程の中で「宗教」概念を吸収していった(と思われる)諸地域の状況はとりわけ重要になる。本研究では韓国、中国、インド、東南アジアの状況については重点的に調査を行うことになった。しかし、ここで問題になるのは、各地域の政治的・社会的な事情によって、また日本との交流のあり方によって、入手できる情報にはかなりのばらつきがあることである。例えば、日本はもちろんのこと、北米、西欧の宗教研究は十分に知られており、また、分析も進んでいる。しかし、地域によっては、そこに宗教研究と言えるものがあるのかどうか、具体的に宗教研究を行っている研究者が誰なのか分からないという地域も存在する。以上のような情報蓄積のアンバランスにおいて、本研究チー

ムにおいては、各地域の宗教研究を専門とする研究者を研究分担者として配置して、各地域の情報収集と分析を分担してもらい、それを最終的に統合することで全体像を構築することになった。具体的に、その担当者と分担は次の通りである。

- ①日本：島菌進、高橋原、林淳、*星野靖二
- ②韓国：川瀬貴也
- ③中国：池澤優、鈴木健郎、*住家正芳
- ④東南アジア：矢野秀武、*蓮池隆広
- ⑤インド：近藤光博、*富澤かな
- ⑥イスラーム：塩尻和子
- ⑦イスラエル：市川裕
- ⑧北米：藤原聖子、*奥山倫明
- ⑨中南米：大久保教宏
- ⑩ヨーロッパ（プロテスタント）：久保田浩
- ⑪ヨーロッパ（カトリック）：伊達聖伸、*江川純一
- ⑫ロシア：*井上まどか

*は連携研究者・研究協力者を表す。

但し、この場合、各地域といっても国ごとに状況は異なる（例えば、同じ中国でも大陸と台湾は全く異なる）。従って、各分担者がカバーできない国や社会が出てくるのは避けられないことになる。これは大きな欠点ではあるが、本研究があまり前例のない探索的な性格を持つ以上、やむを得ないであろう。まずは各地域において代表的な国から作業を始めることになったわけである。

実際の研究は、先ず、各地域における宗教研究の代表的な文献のリストを作成し、それを収集した上で、それぞれにおける特徴や独自性を抽出することから始まった。この過程においては、各地域の宗教研究機関への訪問、研究集会への参加、あるいは、海外の研究者を招聘し意見交換することなども、適宜行われた。集めた情報に基づき、研究分担者はそれぞれの地域における宗教研究の歴史を概観し、その特徴がその地域における宗教的・文化的伝統と何らかの関連性を有するかどうか、あるいは関心がどのような方向に向かっているかを分析し、研究会においてそれを発表して、全員で討議を行った。

この分析の過程においては、特に以下の諸点に留意することになった。①当該地域の宗教研究の特徴が、実際の宗教の状況とどのように関係しているか、②訳語を含め、近代的な「宗教」概念と宗教研究をどのような形で吸収しているか、③宗教研究が具体的に高等教育・研究機関においてどのような形態においてなされているか、④それぞれの地域の近

代化のプロセス全体（政治的、社会的）の中において宗教研究はどのように位置づけられているのか、である。本研究の性格からして①②は当然であるが、③④は特に重要である。というのは、宗教研究が現実の社会的営為としてなされている以上、それが抽象的な思弁のレベルだけで成立することはあり得ず、必ず制度—特に高等教育・研究機関の制度—の中で位置を有することで成立するからであり、そうであるなら、それぞれの社会における政治や社会構造を考慮に入れなければ、その宗教研究の特色を理解することはできないからである。

4. 研究成果

文化によって地域によって宗教研究の様態が異なっているだろうという予想はあったが、多様性は我々の予想をはるかに超えるものであった。「宗教学」という語彙はあり、それに関する共通理解はあるのだと考えてきたが、実は各文化の宗教状況や制度設定によって「宗教学」の内容に関する認識は千差万別であり、同床異夢だったのかもしれない。但し、「宗教学」の内実を決定する力学には、幾つかの共通するパターンがあることが分かった。

欧米の場合、「宗教学」はキリスト教との対抗関係の中で成立したが、近代的な学術という制度の中に宗教（キリスト教）がどのように位置づけられたかは国によって異なり、そのため「宗教学」の内実も実はかなり異なっていた。アジアの場合、近代的「宗教」概念をどのように吸収されるのか、土着の概念との整合性がどのようにはかられるのかが決定的に重要であり、それが宗教研究のあり方を相当程度決定する。また、イスラームのように、近代的な学問という枠組み自体を相対化する宗教研究も存在した。

以上の成果を『東京大学宗教学年報特別号』として報告とした。これはUTリポジトリにおいて、2013年7月以降、オンラインで公開予定である。各国の状況に関する個別報告については、こちらを参照されたい。

得られた成果を国際的研究状況に位置づけるならば、次のことが言える。世界各地の宗教研究の展開を総合的に分析した先行研究には（現時点では唯一の書籍として）、Gregory Alles ed. *Religious Studies, A Global View*. London & NY: Routledge, 2008がある。この文献では、主に各国・地域出身の執筆者がそれぞれ該当国・地域の宗教学史について論じるという方式をとっている。ネイティブに委ねるといふこの方式は、代理表

象をめぐるポストコロニアル批評以降の問題意識の下では、一見妥当であるかに見える。実証的にもより信頼できると思われがちである。ところがまた、そのような方式の難として、執筆者間に潜在的に対抗意識が働き、「わが国では宗教研究がこのように開花した」というナラティブが作られ、さらにそのことを編者である米国の宗教学者に認知してもらおうという構図が否応なく浮かび上がってしまう嫌いもある。これは、それ以前は存在すら認知されていなかった宗教研究・研究者を紹介する上では、やむを得ないファーストステップだとはしても、看過できない問題である。

それに対して、本研究では、各メンバーが当該地域の宗教研究にとって外部の者であることを、そういった縛りから研究を引き離すための利点と見なした。そして、近代的宗教概念・宗教学の問題性に関し基礎的認識を十分に共有した上で（これも *Religious Studies, A Global View* のように、研究会抜きに各国の研究者にただ寄稿してもらう場合は困難な点である）、欧米の宗教学史ナラティブにおいて今日まで支配的な、「神学的護教論」対「科学的宗教学」図式、前者から後者への進歩史観からは一定の距離を置いて、担当地域の研究史を学説・制度の両面からとらえることができた。

今後の展望だが、「研究の目的」で述べた、これからの宗教研究をどのような方向で展開していくかという課題については、本研究で遂行した、宗教概念と宗教学の多様性と政治性に関する知見を、今まさに進行している世界の宗教情勢に適用することが挙げられる。というのも、現在の宗教情勢をとらえるために国内外で使われている諸概念、公共宗教、スピリチュアル、宗教復興といった言葉は、上記のような反省を経ることなく、再び普遍概念として安易に使われる傾向があるためである。反省をそれとして自己完結させず、各自のケース・スタディに反映させ、その成果をまた持ちより、検討を重ねることが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 34 件)

①池澤 優、序言、東京大学宗教学年報第 30 号 (特別号): 科学研究費補助金基盤研究 (B) 「宗教概念ならびに宗教研究の普遍性と地域性の相関・相克に関する総合的研究」報告書、査読無、第 30 号 (特別号)、2013、pp. 1-10

②高橋 原、帝国大学における宗教学の展開 (東北編)、同上、pp. 11-28

③林 淳、戦後における東大系宗教学の軌跡—「来るべき宗教学」の予言がはずれたとき—、同上、pp. 29-38

④川瀬 貴也、近代朝鮮半島における「宗教研究」の流れに関するメモ、同上、pp. 39-50

⑤矢野 秀武、タイを流れる欧米宗教学の微風—サーサーン (宗教) と Religion をめぐるタイ宗教学の模索—、同上、pp. 51-70

⑥塩尻 和子、生きられる宗教と宗教学—イスラーム研究再考—、同上、pp. 71-88

⑦市川 裕、ユダヤ教正統主義から考える現代の国家・宗教関係、同上、pp. 89-102

⑧藤原 聖子、アメリカにおける人文系宗教学の制度的位置—「神話と儀礼」としての「宗教」概念の由来—、同上、pp. 103-124

⑨大久保 教宏、ラテンアメリカにおける宗教学の不在—メキシコの事例から—、同上、pp. 125-138

⑩久保田 浩、ドイツ連邦共和国における「宗教学」の制度化を巡る諸問題、同上、pp. 139-158

⑪伊達 聖伸、フランスにおける宗教学・宗教研究の歴史的条件と一般的特徴—パリ高等研究院 EPHE 宗教学部門の展開を中心に—、同上、pp. 159-178

⑫江川 純一、イタリア王国～イタリア共和国における宗教史学、同上、pp. 179-194

⑬藤原 聖子、「コギト」の構造主義?—ジョン・ササン・Z・スミスと北米宗教学—、東京大学宗教学年報、査読無、29、2012、pp. 1-16

⑭林 淳、宗教学的知の形成—仏教学を例に—、日本思想史学、査読有、43 巻、2011、pp. 5-12

⑮Makoto Hayashi, *Religious Studies in Japan: A Historical Perspective, Pantheon*, 査読有、6-1, 2011, pp. 4-14

⑯市川 裕、ユダヤ教におけるタルムード学の意義と批判精神の育成、宗教研究、査読有、369、2011、pp. 57-82

⑰林 淳、学問史から見た仏教史学会、佛教学研究、査読有、53-1、2010、pp. 103-114

⑱矢野秀武、Buddhism in Public Sphere and Concept of Religion: State-Religion Relationship in Contemporary Thailand、駒沢大学『文化』、査読無、29、2010、pp. 120-107

以上、東京大学宗教学年報所収の諸論文については UTリポジトリで公開予定。

<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/#49-0>

[学会発表] (計 21 件)

①矢野 秀武、Religions in Thailand from the Views of Religious Studies in Japan, College of Religious Studies 招聘講演, Aug

15, 2012, Mahidol University, Thailand

②池澤 優、東アジアの文化と現代の死生観—岸本英夫と傅偉勳の事例に見る宗教学者の死—、PESETO（北京・ソウル・東京）三大学人文学会議、2012年3月24日、東京大学

③池澤 優、The Acceptance of the Concept of "Person" and the Tradition of Confucianism in Modern China: Through bioethical discourses as modern religiousness, XXth Quinquennial World Congress of International Association for the History of Religions, Aug 20, 2010, University of Toronto, Canada

④鶴岡 賀雄、Construction of "Mystical Experience" in Early Modern Christianity, XXth Quinquennial World Congress of International Association for the History of Religions, Aug 19, 2010, University of Toronto, Canada

⑤林 淳、Religious Studies in Japan: a Historical Perspective, XXth Quinquennial World Congress of International Association for the History of Religions, Aug 19, 2010, University of Toronto, Canada

⑥林 淳、Shadows of Max Müller, XXth Quinquennial World Congress of International Association for the History of Religions, Aug 20, 2010, University of Toronto, Canada

⑦矢野 秀武、Religious Administration and Activities of the Thai Government: The Concept of Religion and the Relationship between State and Religion, XXth Quinquennial World Congress of International Association for the History of Religions, Aug 20, 2010, University of Toronto, Canada

⑧高橋 原、Psychological Approach to Japanese Myth and Nihonjinron, XXth Quinquennial World Congress of International Association for the History of Religions, Aug 20, 2010, University of Toronto, Canada

⑨高橋 原、日本の心理学的神話研究の歴史と特徴—河合隼雄の中空構造論を例として—、日本宗教学会第69回学術大会、2010年9月5日、東洋大学

〔図書〕（計6件）

①鶴岡 賀雄・深澤 英隆編、スピリチュアリティの宗教史 下巻、リトン社、2012、510

②宇野 重規・伊達 聖伸・高山 裕二、社会統合と宗教的なもの—19世紀フランスの経験—、白水社、2011、266

③鶴岡 賀雄・深澤 英隆編、スピリチュアリティの宗教史 上巻、リトン社、2010、468

④伊達 聖伸、ライシテ、道徳、宗教学—もうひとつの近代フランス宗教史—、勁草書房、2010、ix+536+50

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池澤 優 (IKEZAWA MASARU)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：90250993

(2) 研究分担者

近藤 光博 (KONDO MITSUHIRO)

日本女子大学・文学部・准教授

研究者番号：00453936

藤原 聖子 (FUJIWARA SATOKO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：10338593

島菌 進 (SHIMAZONO SUSUMU)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：20143620

市川 裕 (ICHIKAWA HIROSHI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：20223084

矢野 秀武 (YANO HIDETAKE)

駒澤大学・総合研究教育部・准教授

研究者番号：20422347

川瀬 貴也 (KAWASE TAKAYA)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：30347439

高橋 原 (TAKAHASHI HARA)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：30451777

塩尻 和子 (SHIOJIRI KAZUKO)

東京国際大学・国際交流研究所・教授

研究者番号：40312780

大久保 教宏 (OKUBO NORIHIRO)

慶應義塾大学・法学部・教授

研究者番号：40317285

鈴木 健郎 (SUZUKI TAKEO)

専修大学・商学部・准教授

研究者番号：40439518

鶴岡 賀雄 (TSURUOKA YOSHIO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：60180056

久保田 浩 (KUBOTA HIROSHI)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：60434205

林 淳 (HAYASHI MAKOTO)

愛知学院大学・文学部・教授

研究者番号：90156456

伊達 聖伸 (DATE KIYONOBU)

上智大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90550004

(3) 連携研究者

奥山 倫明 (OKUYAMA MICHIAKI)

南山大学・南山宗教文化研究所・教授

研究者番号：30308928

江川 純一 (EGAWA JUNICHI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員

研究者番号：40636693

星野 靖二 (HOSHINO SEIJI)

國學院大學・研究開発推進機構・助教

研究者番号：50453551

住家 正芳 (SUMIKA MASAYOSHI)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：60384004

井上 まどか (INOUE MADOKA)

清泉女子大学・文学部・講師

研究者番号：70468619

富澤 かな (TOMISAWA KANA)

東京大学・総合教育研究センター・特任助教

研究者番号：80503862